青年トルコ人革命前史

——レスネのニヤーズィ蜂起の歴史的意義——

設 楽 國 廣

The Movement of Ahmet Niyâzi Bey in Resne : Precursory of
Young Turks Revolution of 1908.

Kunihiro SHIDARA

On the 3rd of July 1908, Major Niyâzi, who was the vice commander of the 3rd Battalion, 88th Regiment, 3rd Osmanli Army Corps, in Resne (now Yugoslavia) and who was also a member of the Committee of Union and Progress, rebelled against the Osmanli Government. He, along with approximately two hundred sympathizers consisting of armed Osmanli officers, soldiers and civilians, went into the mountain to plan their revolt. The purpose of their revolt was for the re-establishment of the Osmanli Constitution of 1876, which was guaranteed to all Osmanli subjects. This rebellion was the birth of the Young Turks Revolution. The Young Turks Revolution was started by Major Ahmet Niyâzi and his sympathizers themselves with no order of the Committee of Union and Progress.

I はじめに

オスマン帝国では、最初の近代憲法が、ミトハト＝パシャ Mithat Paşa らの起草によって、1876年に発布された。ところが、翌1877年、スルタン、アブデュル＝ハミト Abdülhamit 2世により、憲法は停止され、それに伴ない、議会も閉鎖されて、スルタンの専制政治が、その後つづいた。この専制政治を打倒し、立憲体制の復活を要求する「青年トルコ人運動」が、1889年イスタンブルの軍医学校学生イブラヒム＝テモ İbrahim Temo 等による「統一と進歩

委員会」創設により、開始された。

「青年トルコ人運動」は、1908年7月23日の、スルタンによる憲法復活宣言によって、一応成功したとみることができる。これが、いわゆる「青年トルコ人革命」もしくは、1908年革命である。

この「青年トルコ人革命」については、E. E. Ramsaur, F. Ahmet, B. Lewis 等による研究書がある。⁽¹⁾これらの研究において、共通してみられる特徴として、1908年7月のマケドニア地方で急激に発展した憲法復活要求運動が、パリおよびサロニカに設置された「統一と進歩委員会」本部の指導のもとに推進されていたとしている点をあげることができる。すなわち、1908年7月以前の「統一と進歩委員会」の諸活動と、1908年7月以後オスマン朝政府に対する「統一と進歩委員会」の影響力の強大化とが、単純に直結させられている。そして、革命前夜の動向については、革命後「実力者」として、「統一と進歩委員会」の中枢をしめた者たちを中心として、簡単に述べられているにすぎない。これらの問題に対して、トルコ人研究者が、革命前夜に活動したグループ⁽²⁾についての事実関係を呈示しているものの、体系的な研究は少ない。しかし、İ. H. Uzunçarşılıが、「実力者」たちではなく、革命前夜に活動したグループ⁽³⁾についての資料をまとめたものの、彼らの革命における役割等については、なお検討の余地があると思われる。

しかし、「統一と進歩委員会」の直接指令をうけることなく武装蜂起したグループが、ややもすれば無視されがちであった。革命後かならずしも「実力者」とみなされなかったものの、武装蜂起グループという、革命への原動力が存在し、かつ、彼らの行動こそが、「統一と進歩委員会」を導びいて、革命を達成させたとは、私は考える。本稿では、こうした武装蜂起グループのうち、レスネ⁽⁴⁾(現在の地名レセン)におけるニヤーズィ Niyâzî 上級大尉の武装蜂起を、(1)その準備段階、(2)「統一と進歩委員会」との関係、(3)武装蜂起に対するオスマン朝政府の対応の仕方などを検討することによって、ニヤーズィ上級大尉の武装蜂起が、1908年革命への原動力となったことを明らかにしたい。

II 20世紀初頭のマケドニアの社会・政治状況

1908年革命は、一般に考えられているように、オスマン帝国全土において、

同時発生的になされたものではなく、ルメリ（オスマン帝国のヨーロッパ領土）地方、特に、マケドニア地方の軍人および知識人によって、先導され、展開されたものである。このため、19世紀末から20世紀初頭にかけてのマケドニア地方の政治的・社会的状況を、あらかじめ概観しておく必要がある。

マケドニア地方は、オスマン帝国内でも、とくに複雑な民族構成をもっていたことで知られている。この地方は、オスマン帝国の行政区分の中では、サロニカ・マナストゥル・コソヴァの3州からなっていた。その民族構成は、およその区分として、東部にブルガリア系住民、西部には、アルバニア系住民、そして、南部にはギリシア系住民が多く居住し、トルコ系住民が、それらの居住者の間に散在していたといえるが、全体的にながめれば、ブルガリア系住民が、比較的多数をしめていた。

ブルガリア系住民は、1878年のサン＝ステファノ条約により、マケドニア地方のブルガリア合併が決定されていたにもかかわらず、4ヶ月後のベルリン条約によって、マケドニア地方が、オスマン帝国領内にとどまるとの決定が下されたこと⁽⁵⁾に対して、不満をもっていた。このため、ブルガリア系マケドニア人住民および、ブルガリア政府は、マケドニア地方のブルガリア正教会の指導や、ブルガリア人学校の教師たちの支援をうけて、ブルガリア系住民の民族自立運動をすすめた。特に、1902年から翌年にかけてのマケドニア地方のブルガリア系住民の蜂起は、大規模なものとなった。しかし、この蜂起は、オスマン朝軍第3軍（マケドニア軍：司令部所在地サロニカ⁽⁶⁾）の正規軍部隊のほか、ムスリム・アルバニア人によって編成されていた予備役部隊をも投入して鎮圧作戦にでた結果、平定することができた⁽⁷⁾。

また、ブルガリア系住民以外のマケドニア地方在住のキリスト教徒たちも漸次武装を強化した。これらの武装勢力を中心とするゲリラ活動は、民族的対立だけでなく、利害の不一致による各組織間の対立を生む場合もあった。このため、ヨーロッパ諸列強は、マケドニア地方の政情不安を理由に、マケドニア地方の内政に干渉し、1904年には、マケドニア地方のジャンダルマ（軍事保安警察）組織の把握に乗り出した。このような、ヨーロッパ諸列強の干渉は、かえって、マケドニア地方の住民や軍人に不安を与え、オスマン帝国領内に住む全オスマン人の意志統一の必要性を主張する立憲体制復活運動が、相互に対立する

各民族グループにとっても、身近な問題として理解されるようになった。このような状況が、マケドニア地方をして、1908年革命への原動力とさせたのである。

III レスネの蜂起

1908年革命へ向けて、オスマン帝国内でのスルタン、アブデュル＝ハミト2世の専制政治打倒、立憲体制復活を目的とする実力行動は、1908年7月3日に、ニヤーズィ上級大尉の率いる約200名のマケドニア地方コソヴァ州オフリ湖に近いレスネ町で起こされた武装蜂起である。

この蜂起については、レスネ町に最も近い都市マナストゥル（現在の地名ビトラ）に駐屯していたマナストゥル管区司令官 オスマン＝ヒダエト＝パシャ Osman Hidayet Paşa の署名で、サロニカの第3軍司令官イブラヒム＝パシャ İbrahim Paşa に送られた電報が、最初の公式報告である。⁽¹¹⁾

1324年6月20日（西暦1908年7月3日）⁽¹²⁾レスネに駐屯する第88連隊第3大隊長ニヤーズィ上級大尉が、レスネ町長ホジャ＝ジェマル Hoca Cemal, 税務官タフスィン Tahsin, 警視マーヒル Mahir,⁽¹³⁾ ユスフ Yusuf 中尉等および、セルビア人学校の教師、レスネ住民、さらに、多数の兵士を含む100名の集団を編成し、大隊の武器庫から、100丁のモーゼル銃と数量不明の弾薬を持ち出し、原隊から離脱した。

この電報は、これを受けた第3軍司令官イブラヒム＝パシャから、翌6月21日（西暦1908年7月4日）付で、スルタン府へあてられた報告電報に添付された。イブラヒム＝パシャの電報では、「ニヤーズィは、レスネ生れであり、第88連隊付の上級大尉であるとともに、大隊長代理に任命され」ていたと記されている。⁽¹⁴⁾ Uzunçarşılı は、第88連隊第3大隊長には、ある少佐が任命されていたが、着任に遅れていたため、ニヤーズィ上級大尉が同大隊の指揮官となっていたと述べている。⁽¹⁵⁾ しかし、ニヤーズィ上級大尉は、レスネの第88連隊第3大隊のレフィキ Refik 少佐あての1324年6月20日（西暦1908年7月3日）の通告文で、⁽¹⁶⁾「私が、急に蜂起したことに対して、大隊の一般将校の私に対する非難が、貴官の耳に入らと思うが、私の行動を違法行為とするならば、早急に貴官は、私を罰すべきである。」と書き送っていることから、ニヤーズィ上級大尉は、第88連隊の大隊長代理と考えるのが適当である。なぜならば、同大隊に

少佐の階級のレフィキが存在していたことは、少なくとも、彼が大隊長でなければならぬことを示している。

レスネの武装蜂起は、ニヤーズィ上級大尉によって計画されたものであると同時に、マナストゥル管区司令官の報告電報にあるように、レスネの有力者が参加していることも見逃がしてはならない。また、ニヤーズィ上級大尉の所属する部隊が、部隊全体として一致して蜂起したわけでもないことを指摘しておきたい。

さて、この蜂起は、1908年6月9日エストニアのレヴァルで、ロシア皇帝ニコライ2世とイギリス国王エドワード7世が会談した結果、マケドニア地方の分割が決定されたと伝えられたことから、急速に準備された⁽¹⁷⁾。ニヤーズィ上級大尉は、「私の武装蜂起の決意を、1324年6月15日（西暦1908年6月28日）に、レスネ町長ジェマルおよび警視ターヒル Tahir（ママ）に伝え」と記しており、相談をうけた2人は、当初、蜂起に反対したものの、結局、蜂起に参加することを決意したと回想録で述べている。⁽¹⁸⁾

蜂起の具体的準備は、ニヤーズィ上級大尉と、オスマン＝ジェウデド Osman Cevdet 大尉によって進められた。2人の交信の手紙が、蜂起後押収され、蜂起の2日後の1324年6月22日（西暦1908年7月5日）付の第3軍司令官イブラヒム＝パシャからスルタン府官房長宛の第1789号文書番号をもつ電報に添付された。⁽¹⁹⁾ 以下その手紙を引用する。

A. 1324年6月18日（西暦1908年7月1日）

署名：アフメト＝ニヤーズィ上級大尉。

「私が、手紙で指示したように、あなたは、電報局員やキリスト教徒と接触しないようにしなさい。金曜日（1908年7月3日）の4時（現在の10時）⁽²⁰⁾に行動を開始しなさい。ここへは、11時（17時）に隠れなさい。銃と弾薬は、以前に決定したように隠置しておくこと。あなたに同行する者には、モーゼル銃で武装させなさい。」

B. 1324年6月18日（西暦1908年7月1日）

署名：オスマン＝ジェウデド大尉。

「私が受け取るはずの武器を、今夜4時（夜10時）にクルハン（Kulhan）に送ります。数は58丁です。民兵は7—10名が同行します。明日夕刻、電

報局であなたが待ってくれることを希望します。」

C. 1324年6月19日 (西暦1908年7月2日)

署名：オスマン大尉。

「本日、民兵から19丁の銃を受け取りました。今夜4時 (夜10時) クルハンから武器を受け取りに来るであろう。あなたの命令どおり、行動しました。ジャンダルマたちの中では、軍曹1名が参加する。明日3時 (7時) に行動を開始すれば、都合が良いと思います。あなたの方では、まだ、武器を手に入れていないのですか。」

D. 6月19日 (西暦1908年7月2日)

署名：ニヤーズィ上級大尉。

「あなたは、もう少し早く行動開始した方が良い。我々は、金曜日の礼拝をしている時間にラフジェへ行く予定である。」

E. 1234年6月19日 (西暦1908年7月2日)

署名：ニヤーズィ上級大尉。

「霧にまぎれて行動しなさい。そして、すぐにラフジェ近辺の林に隠れなさい。あなたがたの所在を、バフリエ=チャウシュ Bahriye Çavuş に伝えなさい。金曜日の礼拝の最中に、我々は、銃を持ってあなたがたの所へ出かける。あなたがたは、ジャンダルマとともに、村の愛国者を伴って来なさい。」

F. 1324年6月19日 (西暦1908年7月2日)

署名：アフメト=ニヤーズィ上級大尉。

「最終命令は次のとおりである。13, 8, 4, 14, 35の番号をもつ民兵は、参加させて銃と弾薬を持たせなさい。官吏やキリスト教村民は暗殺したので警戒の必要はない。なお、m, t, h, c, y, yi の記号をもつ者は、今のところ残留させなさい。」

これらの文書からも、レスネの武装蜂起の指令は全てニヤーズィ上級大尉から出ており、全体的計画も、彼のものであったことが明らかである。さらに、多量の武器・弾薬が蜂起軍の手に入っていることもうかがえる。

また、蜂起が、レスネ住民の目に触れないよう金曜日の礼拝のため人びとがモスクに集まっている時間を利用していることから、この武装蜂起が、レスネ

住民の蜂起というよりは、前述した蜂起参加者等からも推察されるように、レスネの軍人および知識人らを中心とした蜂起であると考えられる。

ニヤーズィ上級大尉に率いられた蜂起参加者の数は、前に引用したマナストゥル管区司令官の公電によれば、100名であるが、ニヤーズィ上級大尉が蜂起とともに出した布告・声明文には、「レスネ 国民軍大隊隊長 ニヤーズィ上級大尉⁽²¹⁾との署名のほか、「200名の愛国者の名のもとにニヤーズィ上級大尉⁽²²⁾も使用されている。また、1324年6月20日付のマナストゥル州のマナストゥル県長官イスマイル＝ハック İsmail Hakkı 宛のニヤーズィ上級大尉の手紙には、「200名の愛国者と祖国のために」行動を開始すると書かれていることから、参加者は、約200名と考えることができる。

この約200名の武装蜂起者は、レスネの町を離れ、町の西部山岳地帯へ潜入した。山岳地帯へ潜入する前に、ニヤーズィ上級大尉は、各方面へ、武装蜂起の声明文を電報で送った。その宛先は、「スルタン府官房長・ルメリ地方総督・マナストゥル州知事」、「マナストゥル・ジャンダルマ司令官」、「レスネ・ジャンダルマ司令官」および、前述の「レスネ 駐屯第88連隊第3大隊レフィキ少佐⁽²⁴⁾」をあげることができる。これらの電文は、「スルタンの悪政が30年も続いている。これを阻止するために、憲法の復活を要求する。」⁽²⁵⁾という内容をもっていた。これから、武装蜂起の目的が、憲法の復活にあったことは明らかである。

ニヤーズィ上級大尉の武装蜂起は、1908年6月9日のレヴァル会談の強い影響をうけていたが、この直接的動機のほか、長期間にわたり蓄積されたアブデュル＝ハミト2世の専制政治に対する批判があった。

1303年（西暦1897/1898年）、まだ、14才にもならない幼年学校の生徒であったころ、わが祖国が崩壊し、国民および政府が無力化していく様子を見て、スルタンの悪政を知った。⁽²⁶⁾

とニヤーズィ上級大尉は、回想録に述べている。彼は、兵役につく前から、オスマン帝国の衰退が、アブデュル＝ハミト2世の専制政治にあることを見ぬいていた。それゆえ、ニヤーズィ上級大尉の主張は、アブデュル＝ハミト2世の専制政治に反対することであって、オスマン帝国を分解・分立させることはまったく考慮していなかった。すなわち、オスマン帝国としての統一体の存続を

求めているのである。これは、オスマン帝国内の様々な民族・宗教の区別なく、帝国内の住民をオスマン人としてとらえるオスマン主義の主張がニヤーズィ上級大尉の基本思想であった。これは、蜂起の2日後(1908年7月5日)ブルガリア語の声明文をブルガリア人村民およびブルガリア人ゲリラに出していることからもうかがえる。

この声明文は、「わが祖国において、数世紀にわたる悪政に対して、攻撃を加える時期が到来したことを、キリスト教徒オスマン人同志に宣言する」ではじまり、「マケドニア問題に対するブルガリア、ギリシア、セルビア各国の干渉は、マケドニア地方住民の利益のためではなく、自国の利益のために行なわれている」と、マケドニア地方を囲む諸国の動きを批難し、あわせて「ヨーロッパ諸国がこれらの諸国に圧力を加えている」と非難をつづけている。このような状況下で、「マケドニア人」である「われわれは、現在の支配体制に不満を持っている」と、キリスト教徒の同意を求め、「トルコ人、ブルガリア人、ウラフ人、ギリシア人、アルバニア人であるわれわれ同胞は、崩壊されてゆく祖国のために自由への行動を起こす」ことが必要であるとし、「トルコ人が、オスマン帝国を救済するため努力をしている。この目的で、『統一と進歩委員会』が結成された。」と述べている。⁽²⁷⁾この声明文は、ウィーンのタイムス紙特派員も、7月22日付で送稿し、23日の外電記事とされている。⁽²⁸⁾

ニヤーズィ上級大尉の武装蜂起は、上述のごとく、マケドニア地方在住の諸民族の結束をも訴えていた。そして、この武装蜂起の目的である憲法復活要求は、大部分のオスマン人によって受け入れられた。これは、1908年7月23日に、サロニカ、マナストゥルなどのルメリ地方の諸都市で、憲法復活が宣言されると、ギリシア人とトルコ人が手を取りあって喜んでいたとの報告等で明らかである。⁽²⁹⁾

IV レスネ蜂起と「統一と進歩委員会」

レスネの武装蜂起を指導したニヤーズィ上級大尉は、前述のブルガリア語の声明文で明らかのように、「統一と進歩委員会」と深い関係を持っていた。このレスネ蜂起と「統一と進歩委員会」との関連は、憲法復活運動の指導性を明らかにするために、ぜひ解明しなければならない。

ニヤーズィ上級大尉が、レスネの武装蜂起をスルタン府官房長等に通告した電文は、一人称で書かれており、「統一と進歩委員会」との関係については、なにも触れていない。このことから、レスネ蜂起は、ニヤーズィ上級大尉個人の指導によるものとみることができる。

ニヤーズィ上級大尉は、「統一と進歩委員会」のマナストゥル本部に所属しており、そして、マナストゥル本部は、「最も行動的な本部」であることは、サロニカ本部第1クラブの責任者キャズム＝ナミ＝ドゥル Kâzım Nami Duru の回想録に記されている。また、「統一と進歩委員会」サロニカ本部の創始者のひとりであり、かつ、マナストゥル本部結成のため、エンベル Enver（「統一と進歩委員会」内閣成立後の国防大臣）上級大尉を担当者に任命した実力者のドゥルが、レスネ蜂起について、事前に何の連絡も受けていなかったことは、彼の回想録と次のような記述から明らかである。⁽³⁰⁾

マナストゥル本部は、最も優れた活動を行なっている本部である。さらに、私は、レスネ出身のニヤーズィが、「統一と進歩（委員会）」のゲリラとして、山岳地帯に潜入したことを（のちに）知った。

また、マナストゥル本部の創始者であり、サロニカ本部の構成員でもあるエンヴェル上級大尉は、蜂起準備のため、単独で、山岳地帯へ入り工作をはじめていたが、彼も回想録で次のように述べている。⁽³¹⁾

この時、ニヤーズィ上級大尉のレスネ蜂起を知った。私が、マナストゥルに向かう必要はなくなった。（中略）私は、ティキウェシに向かうことにした。

このように、「統一と進歩委員会」のサロニカおよびマナストゥル両本部の有力者の察知しない状態で、マナストゥル本部の構成員であるニヤーズィ上級大尉が蜂起していることから、レスネ蜂起には、「統一と進歩委員会」が、直接指導を行なっていなかったとみることができる。

さらに、ニヤーズィ上級大尉は、レスネ蜂起後、多くの布告・声明文の署名において、一通だけ『統一と進歩委員会』の200名の愛国者の名のもとに、ニヤーズィ上級大尉⁽³²⁾とあるが、その他の文書には、「レスネ 国民軍大隊司令官アフメト＝ニヤーズィ上級大尉」の署名が付されている。

ニヤーズィ上級大尉は、蜂起の2日後（1908年7月5日）、「統一と進歩委員

会」マナストゥル本部へ、蜂起の事実を伝達している。⁽³³⁾ Y. H. Bayur は、「トルコ革命史」で、「ブルガリア人へのニヤーズィ上級大尉の声明文に対する『統一と進歩委員会』マナストゥル本部の反応は消極的であった。また、マナストゥル本部が、マナストゥルの町角に張り出した声明文では、スルタンの直接非難ではなく、スルタン側近の悪政によるスルタンの失政が批判の対象となっていた。それゆえ、憲法の復活により、側近の悪政を廃し、スルタンの善政を求めるべきだと主張した。」と述べている。⁽³⁴⁾ さらに、Bayur は、「統一と進歩委員会」マナストゥル本部が、消極的ながら、レスネ蜂起を支持したことにより、⁽³⁵⁾ 同本部が、引き返すことのできない立場となったと述べている。

このように、「統一と進歩委員会」マナストゥル本部は、蜂起に対し積極的参加をしなかったことがうかがえる。⁽³⁶⁾

以上のことから、ニヤーズィ上級大尉のレスネ蜂起は、「統一と進歩委員会」の指導のもとに行なわれたものではなく、ニヤーズィ上級大尉が独自に計画したものであり、蜂起後も、「統一と進歩委員会」マナストゥル本部でさえ、少なくとも当初においては積極的支援を行っていない。

V レスネ蜂起に対するオスマン朝政府の対応

1908年7月3日のレスネ蜂起は、即刻マナストゥル管区司令官オスマン＝ヒダエト＝パシャから、第3軍司令官イブラヒム＝パシャに伝達され、さらに翌4日付で、イブラヒム＝パシャは、スルタン府への報告を行なった。⁽³⁷⁾

スルタン、アブデュル＝ハミト2世は、ルメリ地方で、最も信頼のできる將軍のひとりジェムスィ＝パシャ Şemsî Paşa に対し、レスネ蜂起鎮圧出動を命じた。ジェムスィ＝パシャはマケドニア地方のコソヴァ州プリシティ（現在のプリシティナ）県のメトロヴィチに司令部を置く、第18正規軍師団長であった。⁽³⁸⁾ 彼が、スルタンの命令を受領した場所は、ピズレン（現在のプリズレン）であった。Uzunçarşılı によれば、スルタンは、ジェムスィ＝パシャに、第18正規軍師団のほか、1個師団の予備役兵の増援を約束した。⁽³⁹⁾ スルタンが信頼篤い將軍を指揮官に任命し、2個師団の兵力の投入を決定したことは、レスネ蜂起に対する重大関心があったことを想起させる。

ジェムスィ＝パシャは、1908年7月6日各々500名定員の2個大隊と、身辺

警護のためピズレン町長直属の20名のアルバニア兵で編成された先遣隊を率いて、鉄道でピズレンを出発した。同部隊は、サラニカで、第3軍司令部への報告のため数時間の滞在の後、マナストゥルに向かった。⁽⁴⁰⁾

1980年7月7日早朝、先遣隊は、マナストゥルに到着した。Uzunçarşılı は、シェムスィ＝パシャが、かつてアルバニア地方での反乱鎮圧にあたっていたが、その時の残虐行為は有名となっていたので、彼のマナストゥル到着は、マナストゥルで再びシェムスィ＝パシャの残虐行為が行なわれる可能性を生むとして、「統一と進歩委員会」の構成員は、恐れていたと述べている。⁽⁴¹⁾

シェムスィ＝パシャの派遣は、レスネ蜂起鎮圧のためのだけでなく、マナストゥルを中心とする「統一と進歩委員会」の反政府活動対策でもあったことは、必要以上の大兵力の投入および、「統一と進歩委員会」構成員が恐怖をいっているシェムスィ＝パシャを派遣したことから類推される。シェムスィ＝パシャは、1324年6月24日（西暦1908年7月7日）に、スルタン府へ次のような、マナストゥルの情勢報告を行なっている。⁽⁴²⁾

今朝、2個大隊を伴ないマナストゥルに到着した。第69連隊第4大隊がヤコヴァから到着するのを待っている。（中略）マナストゥルの軍規は乱れている。「統一と進歩委員会」の組織は、これを確認することができない。しかし、部隊視察のためイシティブに派遣したエンヴェル参謀少佐が、現地で、制服を捨て、「統一と進歩委員会」に合流したことが判明した。

この報告書からも、シェムスィ＝パシャのマナストゥル派遣は、「統一と進歩委員会」に対する弾圧のためのものであったと考えられる。また、この報告書により、エンヴェルの反政府活動が、はじめて公式に確認されている。

シェムスィ＝パシャは、この報告電報を打った後、電報局の出口で、「統一と進歩委員会」の構成員であるアートゥフ Ātif によって狙撃され即死した。この状況をマナストゥル州知事フズゥ＝パシャ Hıfzı Paşa は、1324年6月24日（西暦1908年6月24日）の内務大臣宛の公電で、次のように伝えている。⁽⁴³⁾

本日、当地に到着したシェムスィ＝パシャは、レスネに向かう車に乗るため、電報局から出たところを狙撃され、1時間15分後に死去した。

この報告は、内務省からスルタン府へ伝えられた。スルタン府官房長タフシン＝パシャ Tahsin Paşa は、回想録で、「この報告を読んだ時、私は、この

問題のもつ重要性を理解することに躊躇しなかった。」と述べているように、オスマン朝政府にとって、シェムスィ＝パシャ暗殺は、重大な衝撃であった。

オスマン朝政府は、レスネ蜂起までの非公然的な憲法復活要求運動を察知していたものの有効な対策を生みだせなかったが、レスネ蜂起を契機に、強力な軍隊を投入して、一気に反政府的な憲法復活要求運動を弾圧しようとした。しかし、逆に鎮圧軍の最高指揮官の暗殺は、オスマン朝政府の危機感が増したことを想起させる。さらに、この鎮圧作戦の最初の段階での混乱は、オスマン朝政府の無力さを露呈させることともなった。

また、シェムスィ＝パシャの暗殺者アートフが、「統一と進歩委員会」マナストゥル本部の援助により、事件後レスネに逃亡できたことは、マケドニア地方の反政府活動の活発化を示している。

VI マケドニア地方のオスマン朝軍によるオスマン朝政府への反抗

シェムスィ＝パシャの後任には、イスタンブルから軍の長老タタール＝オスマン＝パシャ Tatar Osman Paşa が任命された。これと同時にアナトリア地方の部隊が、イズミルに集結し、海路サロニカに向けて移動した。これらの部隊のうち6個大隊が、サロニカからマナストゥルに進出した。

一方、第3軍司令部では、ニヤーズィ上級大尉等の蜂起軍の動向を察知しており、1324年7月3日（西暦1908年7月16日）のスルタン府への報告は、次のとおりである。

一列に並んで、ギョリジェ街道を通過し、3名の正規軍将校の指揮する兵士および不正規兵40—50名が、イスタルオバ町に3時間滞在したのち、必需品を入手して、レスネ湖にそってギョクシュ、ウストゥルガ村の方面へ向った。これは、ニヤーズィ上級大尉等の一行であると理解される。これによれば、ニヤーズィ上級大尉等は、オフリ方面へ移動していることを示している。

このため、タタール＝オスマン＝パシャは、オフリに部隊を先回りさせて、蜂起軍を迎え撃つ作戦にでた。マナストゥル到着のアナトリアからの6個大隊のうち2個大隊が、オフリ進出を命じられた。しかし、アナトリアからの兵士たちの疲労を理由とした抗命にあって、タタール＝オスマン＝パシャの努力に

もかわらず、オフリ進出は困難となった。⁽⁴⁸⁾これにより、タタル＝オスマン＝パシャは、オフリ駐屯予備役大隊に、蜂起軍の制圧作戦を命じた。⁽⁴⁹⁾しかし、オフリ駐屯第二次予備役大隊の大隊長代理エイユブ＝サブリ Eyyub Sabri 上級大尉⁽⁵⁰⁾は、この命令を受領すると、命令に反して、大隊の兵士を率いて蜂起軍に参加してしまった。オフリ郡長スレイマン＝カーニ Süleyman Kâni と、オフリ駐屯軍司令官ハーミト＝ハムディ Hâmit Hamdi 大佐の連名による1324年7月8日（西暦1908年7月19日）の報告電報はエイユブ＝サブリ上級大尉⁽⁵¹⁾の蜂起参加について次のように述べている。

オフリ駐屯第二次予備役大隊大隊長代理エイユブ＝サブリ上級大尉が、数名の将校と員数不明の兵士とともに反乱した。（中略）エイユブ＝サブリ上級大尉に従う者は、約900名であり、オフリ予備大隊配備の900丁のモーゼル銃と95箱の弾薬が、エイユブ＝サブリ上級大尉の同調者に分配された。（中略）エイユブ＝サブリ上級大尉に従う者には、マズハル Mazhar 中尉、薬剤師サドゥルク Sadık 等の他に、ブルガリア人兵士やジャンダルマも含まれている。（中略）アブディ Abdi 中尉、ムルタザ Murtaza 中尉、ジェマル Cemal 中尉も反乱に参加した。エイユブ＝サブリ上級大尉は、自分の率いる大隊以外の大隊から100丁のモーゼル銃と30箱の弾薬および102個のオスマン金貨を手に入れた。

このように、ニヤーズィ上級大尉の蜂起に対して、オスマン朝政府の完全鎮圧の思わくとは反対に、現地へ派遣された鎮圧軍は、反乱や、抗命という態度にでた。

タタル＝オスマン＝パシャは、スルタン府に1324年7月9日（西暦1908年7月21日）の報告電報で次のようなマナストゥルの状況を伝えている。⁽⁵²⁾

現在まで、マナストゥルに到着したアナトリアからの5個大隊は、オフリ進出命令を受けたものの、疲労を訴え、1日の休養を要求している。（中略）これら的大隊に続いて、マナストゥルに到着するであろう予備大隊も、進軍命令に対して、すでに到着した大隊と同様な態度をとるであろうから、（中略）現在サロニカに滞まっている大隊は、他の地域に滞留させ、マナストゥルに派遣しないことが望ましい。

このように、マナストゥルに派遣された部隊はタタル＝オスマン＝パシャの

命令に従がわない状態であった。さらに、同じ日付で、マナストゥル州知事からオスマン朝政府に送られた公電は次のとおりである。⁽⁵³⁾

1324年7月8日(西暦1908年7月21日)付の電報で伝えた反乱者のサーニ＝ムルタザ Sâni Murtaza 予備役大尉、アブディ Abdi 中尉と、メトロヴィチから派遣された正規軍の将校ジェミル Cemil 中尉、ディレジェ村長メフメド＝ニヤーズィ Mehmet Niyazi が、エイユブ＝サブリ上級大尉と合流し、第125連隊第3大隊配備の100丁のモーゼル銃、20箱のモーゼル銃用弾薬、および、第126連隊第3大隊の10箱のモーゼル銃用弾薬(中略)を略奪した。

これは、レスネ蜂起鎮圧のためシェムスイ＝パシャの率いてきたメトロヴィチからマナストゥルに移動した部隊の将校も蜂起軍に参加してしまったことを示している。

このようにして、レスネ、オリフだけでなくマナストゥルも蜂起の影響を受けた。この状況下で、蜂起軍を率いるニヤーズィ、エイユブ＝サブリ両上級大尉が、マナストゥルに入り、タタル＝オスマン＝パシャの宿舎を襲撃し、レスネに連行した事件が発生した。エイユブ＝サブリ上級大尉は、スルタン府ではなく、スルタンに直接あてた電報は次のとおりである。⁽⁵⁴⁾

「統一と進歩委員会」の国民軍連隊の第1オフリ大隊と、同連隊の第2レスネ大隊(大隊長ニヤーズィ上級大尉)は、総司令官オスマン＝パシャ元帥閣下を客人として迎えた。元帥閣下は、今夕7時30分(現在の午前1時30分)に宿舎で、偵察隊により発見され、レスネに同行した。

オフリ第1大隊大隊長エイユブ＝サブリ上級大尉。

この事件は、1324年7月9日(1908年7月21日)に発生したとされるが、午前1時30分となるため、実際は、1908年7月22日未明の発生とする。この事件については、7月22日に第3軍司令官から、スルタン府および陸軍大臣へ報告されている。⁽⁵⁵⁾

タタル＝オスマン＝パシャをレスネに連行したのち、ニヤーズィとエイユブ＝サブリ両上級大尉は、マナストゥルに至り、「統一と進歩委員会」マナストゥル本部と連絡をとった。その結果、1908年7月23日「統一と進歩委員会」マナストゥル本部は、一方的に憲法復活を宣言した。これが、「統一と進歩委⁽⁵⁶⁾

員会」の組織的最初の公然活動であった。これまでは、「統一と進歩委員会」の最も行動的とされるマナストゥル本部ですら、独自で行動する構成員の諸活動を支援するのみであった。ニヤーズィ上級大尉らは、蜂起にあたって、「統一と進歩委員会」を前面にたてる声明文などを発しているものの、⁽⁵⁷⁾実体としては、ニヤーズィ上級大尉および、エイユブ＝サブリ上級大尉等の個々の力量によって、憲法復活要求の武装蜂起がなされた。ここに、憲法復活宣言への道のりが、「統一と進歩委員会」の組織としての運動のみで準備されたものでないことが判明する。

VII おわりに

「統一と進歩委員会」マナストゥル本部は、1908年7月23日に、独自で憲法復活宣言を行い、スルタンに対して、7月26日を期限として、オスマン朝政府によるその公式宣言を要求した。⁽⁵⁸⁾これに対するオスマン朝政府の反応は、全くなかった。一方、「統一と進歩委員会」サロニカ本部は、マナストゥルの状況が伝達されると、各本部・支部に対して、憲法復活を民衆に宣言することを命じた。⁽⁵⁹⁾支部のひとつセレズ支部は、セレズ駐屯第9師団長ハサン＝パシャ Hasan Paşa が、スルタンに対して、7月23日8時30分（現在の2時30分）までに、憲法復活の勅令を発するよう要求した。これに対しても、スルタン府は全く無視した。このため、ハサン＝パシャは、同日9時30分（現在の3時30分）までに、返答の無い場合には、第9師団の全兵力をもって、イスタンブルに進撃すると通告した。⁽⁶⁰⁾この通告に対して、スルタン府は動揺し、憲法の復活を宣言する勅令を発した。特に、セレズの第9師団長ハサン＝パシャに対しては、大宰相以下全閣僚の署名の入った返書を送っている。⁽⁶¹⁾このように、一方的に、「統一と進歩委員会」によって宣言された、憲法の復活は、同じ日の1908年7月23日にオスマン朝政府によって追認されたのである。⁽⁶²⁾

註

- (1) E. E. Ramsaur, *The Young Turks, Prelude to the Revolution of 1908*, Princeton, 1957. F. Ahmet, *The Young Turks, The Committee of Union and Progress in Politics 1908—1914*, Oxford, 1969. B. Lewis, *The Emergence of Modern Turkey*, London, 1961.

- (2) E. Z. Karal, *Osmanlı Tarihi*, cilt VIII, Ankara, 1962. Y. H. Bayur, *Türk İnkılâbı Tarihi*, cilt 1—2, Ankara, 1963. A. B. Kuran, *İnkılâp Tarihimiz ve Jön Türkler*, İstanbul, 1945. A. B. Kuran, *İnkılâp Tarihimiz ve İttihat ve Terakki*, İstanbul, 1948. K. N. Duru, *İttihat ve Terakki Hâtıralarım*, İstanbul, 1957.
- (3) İ. H. Uzunçarşılı, “1908 yılında İkinci Meşrutiyetin ne Suretle ilân edildiğine dair Vesikalar” *Belleten*, Vol. XX, No. 77, pp. 103-174.
- (4) ニヤーズィ (1873～1912) レスネ生れ, マナストゥル幼年学校, イスタンブルの陸軍士官学校で学び, 1896年歩兵少尉に任官。1897年の対ギリシャ戦争では, パシュパナルの戦いで戦功をあげ, 中尉に昇進した。以後1903年まで, オフリ駐屯予備大隊付となり, 1903年から1908年までは, 第88連隊第3大隊付となり, ブルガリア人ゲリラ鎮圧作戦に従事していた。その間上級大尉まで昇進した。1912年暗殺された。
- (5) R. Ekrem, *Osmanlı Muahedeleri ve Kapitülâsiyonlar 1300—1920*, İstanbul, 1934, pp. 218-223, pp. 224-230.
- (6) Bayur, *op. cit.*, pp. 163-170.
- (7) 当時のオスマン朝軍は, 6個軍編成であった。第1軍〔近衛軍〕(イスタンブル), 第2軍〔ドナウ流域軍〕(エディルネ), 第3軍〔マケドニア軍〕(サロニカ), 第4軍〔東部アナトリア軍〕(エルズィンジャン), 第5軍〔シリア軍〕(ダマスカス), 第6軍〔イラク軍〕(バグダド)。19世紀末に, イェーメンに第7軍が創設され, ヒジャズと, リビアに各々独立師団が配された。
- (8) ブルガリア人ゲリラ対策のため, チラナ駐屯のアルバニア人予備大隊が, マケドニア地方へ, 1902年2月28日移動している。K. N. Duru, *Arnavutluk ve Makedonya Hatıralarım*, İstanbul, 1959, p. 10.
- (9) Bayur, *op. cit.*, p. 230.
- (10) ジャンダルマは, 内務省管轄の軍隊であり, 国内治安維持の任務を持つ。ヨーロッパ諸列強は, マケドニア各地のジャンダルマの拠点に将校を派遣し, 内政干渉を行なった。各国の拠点は, フランス (セレズ), イギリス (ドラマ), ロシア (サロニカ), オーストリア (ユスキュブ), イタリア (マナストゥル) であった。
- (11) オスマン朝軍には, 尉官にあたる階級が4つであった。
- (12) Uzunçarşılı, *op. cit.*, p. 108.
- (13) ニヤーズィの回想録には, ターヒルとなっている。註18参照。
- (14) Uzunçarşılı, *op. cit.*, p. 108.
- (15) Ibid., p. 107.
- (16) A. Niyâzî, *Hâtırât-ı Niyâzî*, İstanbul, 1326 H, pp. 85-87.
- (17) Bayur, *op. cit.*, p. 443, Lewis, *op. cit.*, pp. 206-207.
- (18) Niyâzî, *op. cit.*, p. 64.
- (19) Uzunçarşılı, *op. cit.*, p. 153-154.
- (20) オスマン時刻は, 朝6時を0時とする。「夕刻2時, 現在の時刻では夕方の8時にあたる。」Ş. S. Aydemir, *Enver Pasa*, İstanbul, 1970, p. 508.
- (21) Niyâzî, *op. cit.*, p. 80.

- (22) *Ibid.*, p. 101.
- (23) *Ibid.*, p. 73.
- (24) *Ibid.*, pp. 83–88.
- (25) *Ibid.*, p. 83.
- (26) *Ibid.*, p. 13.
- (27) *Ibid.*, pp. 104–108.
- (28) *The Times*, 23 July 1908, p. 7.
- (29) Duru. *op. cit.*, pp. 30–34. などをあげることができる。
- (30) *Ibid.*, p. 21.
- (31) Aydemir, *op. cit.*, pp. 539–542.
- (32) Niyâzî, *op. cit.*, p. 87.
- (33) *Ibid.*, pp. 101–104.
- (34) Bayur, *op. cit.*, p. 449.
- (35) *Ibid.*, p. 442.
- (36) Niyâzî, *op. cit.*, p. 64.
- (37) Uzunçarşılı, *op. cit.*, p. 101.
- (38) *Ibid.*, p. 110.
- (39) *Ibid.*, pp. 108–109.
- (40) *Ibid.*, p. 109.
- (41) *Ibid.*, p. 109.
- (42) *Ibid.*, p. 110.
- (43) *Ibid.*, p. 110.
- (44) Tahsin Paşa : *Tahsin Paşanın Hatıratı*, İstanbul, p. 268.
- (45) Uzunçarşılı. *op. cit.*, p. 110.
- (46) *Ibid.*, p. 111.
- (47) *Ibid.*, pp. 158–159.
- (48) *Ibid.*, pp. 159–161.
- (49) *Ibid.*, p. 114.
- (50) エイユブ＝サブリエアクギョル (1876–1950), マナストゥル生れ。1908年革命後、軍務に専念し、退役後国会議員となる。
- (51) Uzunçarşılı, *op. cit.*, pp. 161–162.
- (52) *Ibid.*, pp. 160–161.
- (53) *Ibid.*, p. 116.
- (54) *Ibid.*, p. 117.
- (55) *Ibid.*, p. 118.
- (56) *Ibid.*, pp. 120–121.
- (57) *Ibid.*, p. 63. Niyâzî, *op. cit.*, p. 87.
- (58) Tahsin Paşa, *op. cit.*, p. 267.
- (59) 各本部、支部はスルタン府へ電報を打ちその数は77通であった。Tahsin, Paşa

op. cit., p.267.

(60) Uzunçarşılı, *op. cit.*, pp. 130-131.

(61) *Ibid.*, p. 134. Tahsin Paşa. *op. cit.*, p. 276.

(62) *The Times*, 24 July 1908. p. 7.

(東京都立第二商業高等学校教諭)